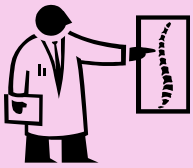


伊藤外科ニュース



94 号

2012.04 発行

春の気配

今年の冬の寒さは厳しく長く、亡父の庭の紅白の梅やアズキの花は例年より寂しげでした。また、3月末は強風や雨で春の気配を感じられずでしたが、31日にやっと桜の開花宣言が出ました。

東京は、お花見とスカイツリーの話題で一時は元気になる事でしょう。4月1日には、新宿中央公園の早咲きの桜はすでに七分咲きで、都庁の建物とのコントラストはいかにも都会の春の風情です。多くの方と同様に、私は春がもっとも好きな季節です。寒く暗い冬からやっと解放され、木花が咲き誇る季節を迎えると心も体も元気になる気がします。

飲酒のはなし

ところで、お花見ではお酒(アルコール)が付き物です。大量のお酒の摂取による急性のアルコール中毒は入学式のあるこの時期に多く発症します。私も学生時代は無茶なお酒を飲んだり飲ませたりしました。



しかし、医者になり深夜の貴重な時間に救急車で運ばれてくる泥酔の若者の対処には困った経験が多くあり、やはりアルコールもほどほどに楽しみたいと思いました。

また、アルコールの常用が、食道、喉頭、口腔がん、大腸や直腸がん、肝臓がん、乳がんなど発症の要因となっている事が報告されています。そして、喫煙はアルコールによる発がん率をさらに増大させます。喉頭、食道のがんは喫煙者でお酒を飲むと赤くなる方に多く、膵臓がんの発症も喫煙とアルコールが強く影響しているようです。

がんの発症に限らず多量のアルコール常用は健康を害します。健康を害さない程度の飲酒量は日本酒で2合未満程度(純エタノール換算20から40グラム)のようです。大酒飲みの方は要注意です。

3月の後半は水様性下痢、38度程度の発熱の感染性下痢症の患者さんが多く来院されました。

多くの原因は腸管ウィルス感染と考えられます。治療の基本は点滴などによる脱水の改善です。高熱の持続や血便の出現などの場合には入院が必要となりますが、多くは数日で改善されます。下痢止めの使い過ぎは慎み、おかゆなどの消化の良い食品を徐々に摂取してください。

最後に、十二社の交差点付近にあったけやきの巨木のうち数本が朽ち、安全のため伐採されました。長い間、新緑を楽しませてくれたので残念ですが、「本当にご苦労様でした」とけやきの木には言ってあげたい気持ちです。



伊藤外科 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)



番外編・松阪紀行

ゴメンナサイ。今月は三弓の本棚をあさりに行く時間が取れなかったので、番外編。

先日、松阪に行ってきた。高級和牛で有名な、三重県の松阪である。でもグルメ旅ではなく、東京から往復6時間かけて、日帰りで『本居宣長記念館』の特別拝観に行った。

本居宣長といえば、江戸時代の国学者である。712年に編纂されて以降、顧みられることが少なかった日本最古の書物『古事記』を研究し、30年以上の歳月をかけて同書の解説書『古事記伝』全44巻を書き上げた人です。本業は医者である宣長は、松阪城の城下町で生涯を過ごした。宣長が暮らした家は明治時代に松阪城跡に移築され、今も記念館が管理する形で残っている。宣長が書斎として使ったこの建物2階の六畳ほどの部屋は「鈴屋」と呼ばれている（宣長は鈴をこよなく愛し、収集家でもあった）。老朽化が激しいため、「鈴屋」はめったに公開されることがないらしいが、今回の特別拝観では、博物館の貴重な収蔵庫と「鈴屋」を公開するというので、いそいそと出かけていった次第。

本居宣長や特別拝観の話が続けると、なんだか深みにハマりそうなので、松阪のことを少々。今回、初めて参りました、松阪の町。町の中央には伊勢街道が横たわっているが、伊勢神宮までは20キロ程度（5〜6里）だそうで、歩いても4〜5時間の距離だ。

週末だというのに町は閑散としていたが、城下町の風情を残したい町である。知らなかったのだが、この町を造ったのは戦国武将の蒲生氏郷だそうで、豊臣秀吉に使えた人だが、秀吉の楽市楽座に学んで、松阪の町を造ったという。街道にも助けられ、松阪は商人たちの町として大きく栄えた。蒲生氏郷といえば、ワタクシが大好きな会津若松の町の基礎を築いた武将として知ってはいたのだが、こんなところでお会いするとは。

松阪出身の商人としてまず名前があがるのが、三井財閥の基礎を築いた三井高利という御仁だそうです。町中を散策中、「三井家発祥地」の碑が建った立派な表門を見かけた。こちらの内部は原則非公開だが、『松阪商人の館』として公開している旧家がある。紙問屋として江戸にも出店を構えていた大店の小津清左衛門家である。17世紀末から18席初頭に建築されたという伊勢街道沿いの建物は、当時の豪商の暮らしぶりを垣間見ることができて、実に興味深かった。

ちなみに、昭和の映画監督・小津安二郎氏も松阪の人である（生まれは東京・深川）。やはり松阪の豪商一族の子であった。小学校の途中から中学まで松阪で育ったらしいが、地元の人のお話では、「小津さんとかの子は、今日も駅前映画館におった」と有名だったらしい。

最後に松阪牛の話のひとつ。駅前ロータリーから伊勢街道に向かっての1本道をまっすぐ行って、2つ目の交差点角に、実に旨そうなステーキ屋があった。隣が松阪牛専門の精肉屋なので、味に間違いはなさそうである。だが、入る勇気と時間がなかった。なんせ、「日帰りひとり旅」だもので。帰路の途中、名古屋駅で買った冷たい「味噌カツ弁当」を新幹線でひとり食べるわびしさも、ワタクシ、けっして嫌いではないんですけどね。